

山行同志に示す（草場佩川）

路は 羊腸に 入つて 石苔 滑かなり

風は 鞋底より 雲を 掃うて 廻る

山に 登るは 恰も 書生の 業に 似たり

一歩 歩 高うして 光景 開く

路入羊腸滑石苔 風從鞋底掃雲廻
登山恰似書生業 一歩歩高光景開

解説 山行に託して、学問は上達するに従い、ものの見方が広くなることを同志に説いた詩。

語釈 ※羊腸 羊の腸のように山路の屈曲したさま。

※光景 景色。 ※鞋底 かわらじのそこ。 足もと。

※書生業 学生の勉学。

通釈 山頂に通ずる路がまるで羊の腸のように曲がりくねった処になると、日のささぬ石には苔が蒸して足も滑りやすく、風は草鞋で歩む足の下の方から雲を吹き払いながら旋回してゆく。こうして、苦労しながら山に登るのは、例えてみれば、全く学生の勉強の様なものであって、一歩一歩高まるごとに、視野が広くなることである。